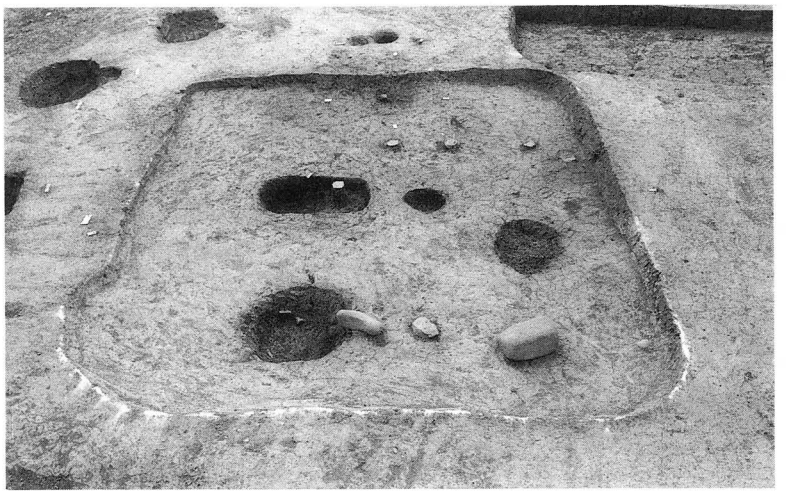
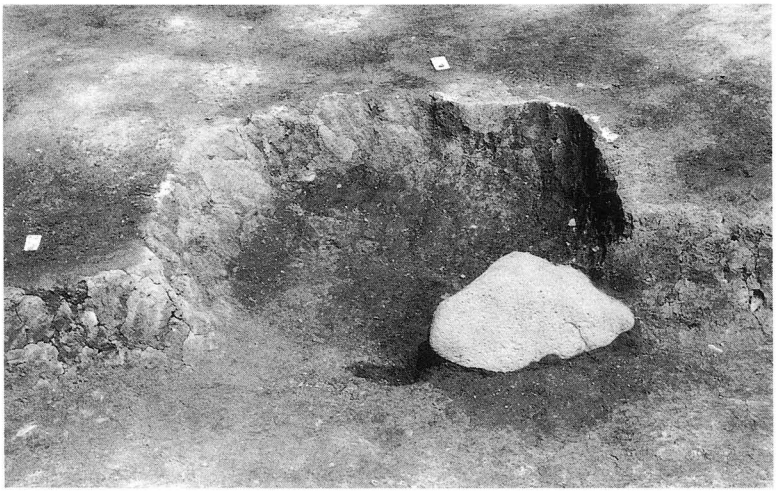


SB－57（W）

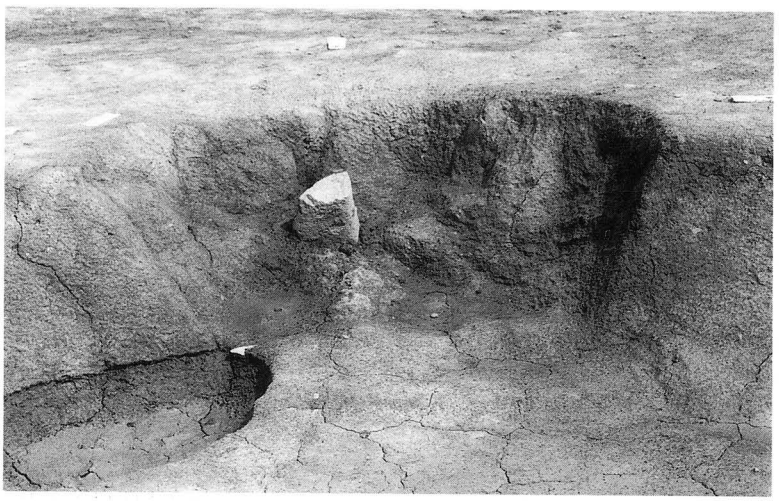
SB－58（W）



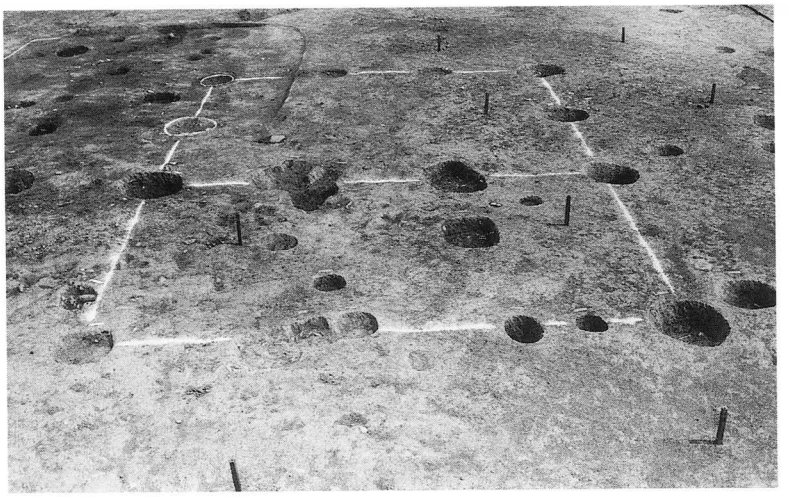
SB－58北壁竈（S）

SB－58東壁竈
（W）

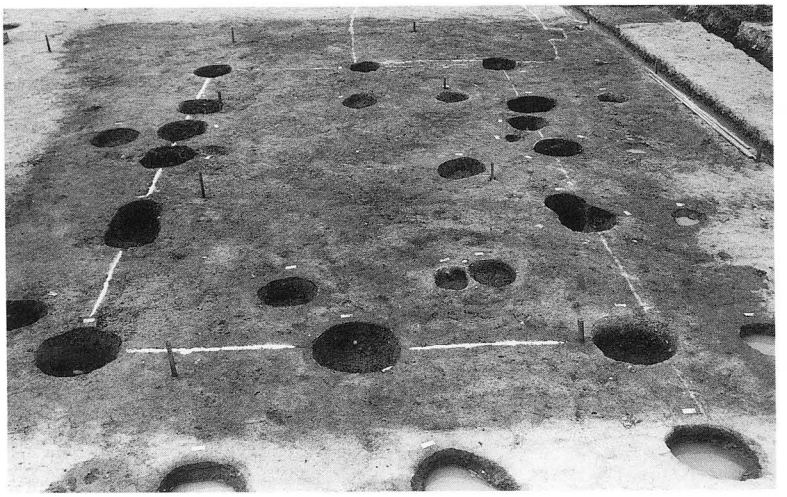
SB－59（W）
右SB－29
手前SB－30
左SB－31.32



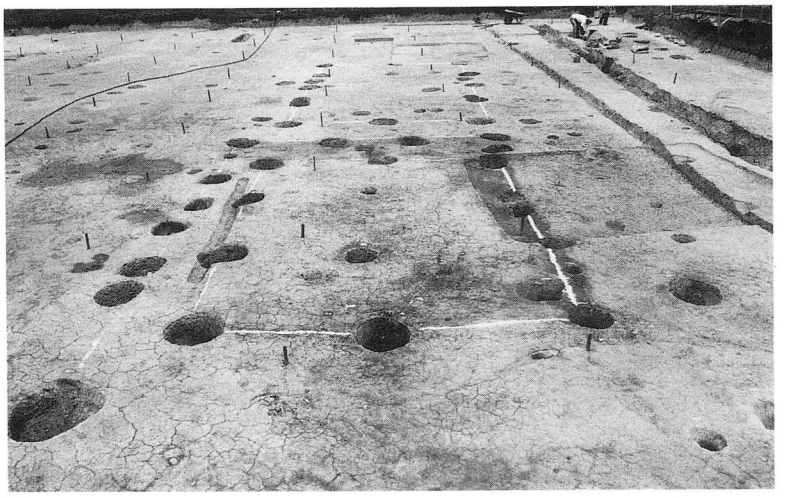
SB－59竈（W）



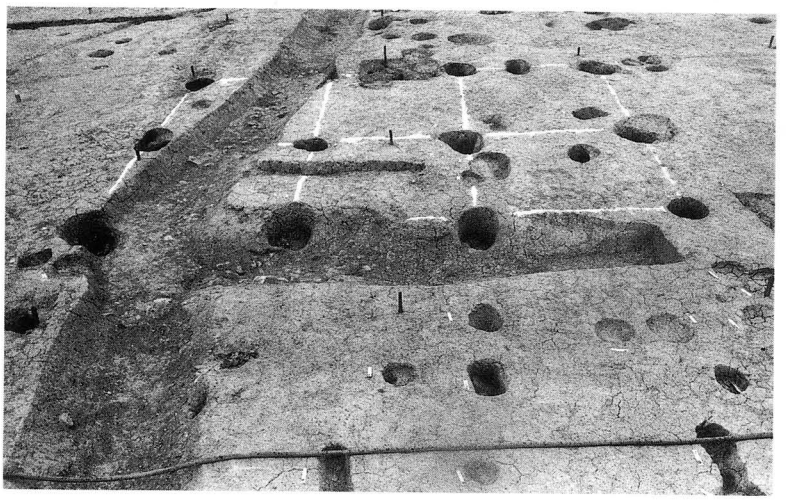
ST－01（S）



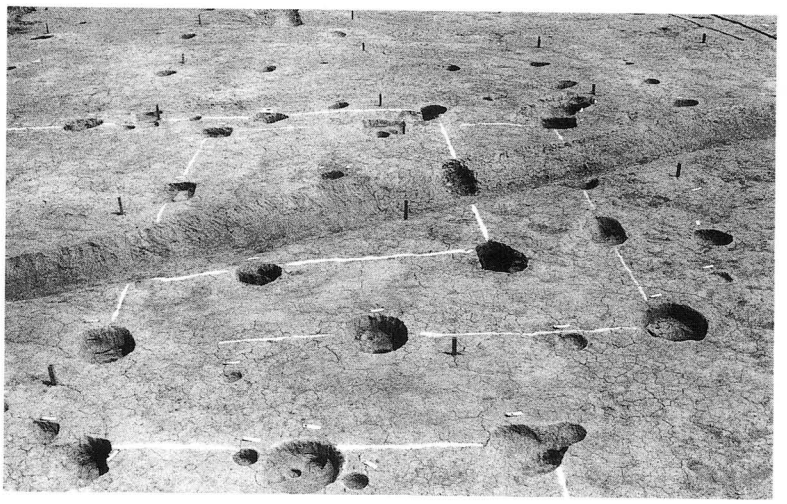
ST－02（S）



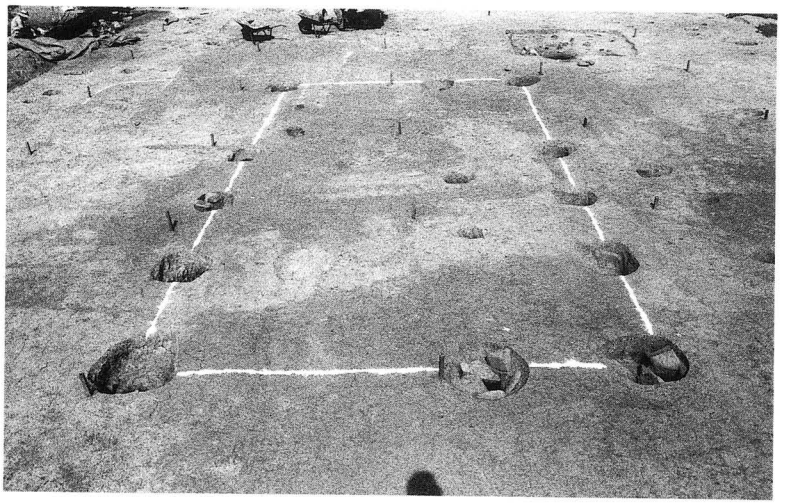
ST－03（S）
奥はST－02



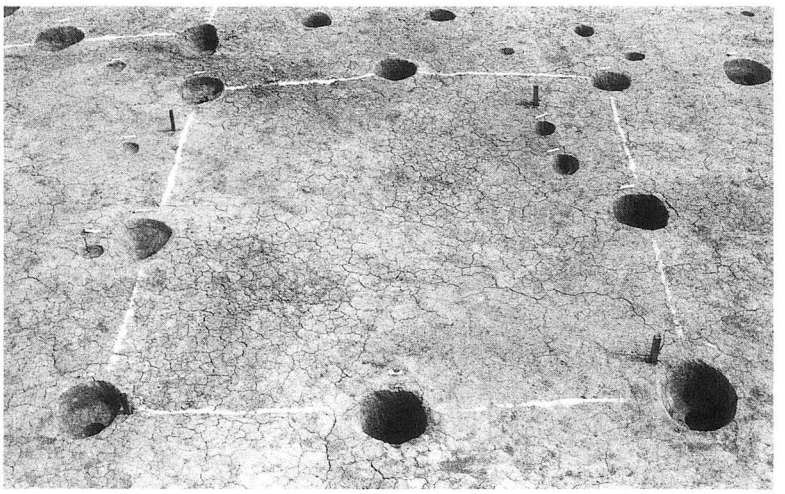
ST－04（W）



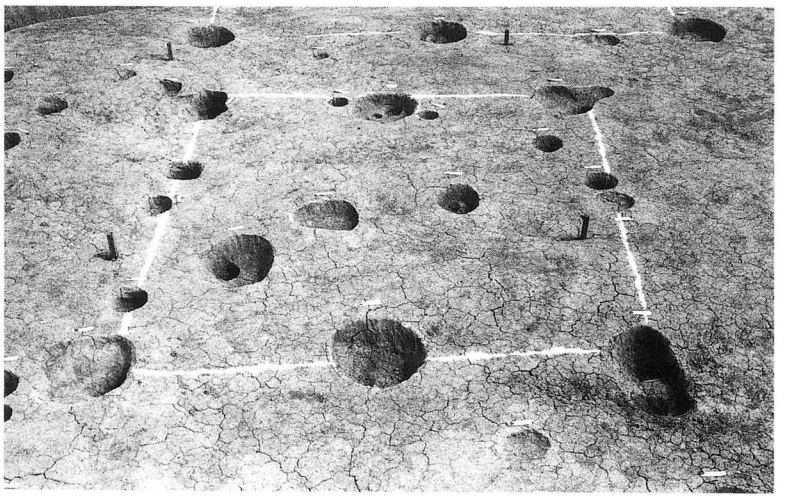
ST－05（S）



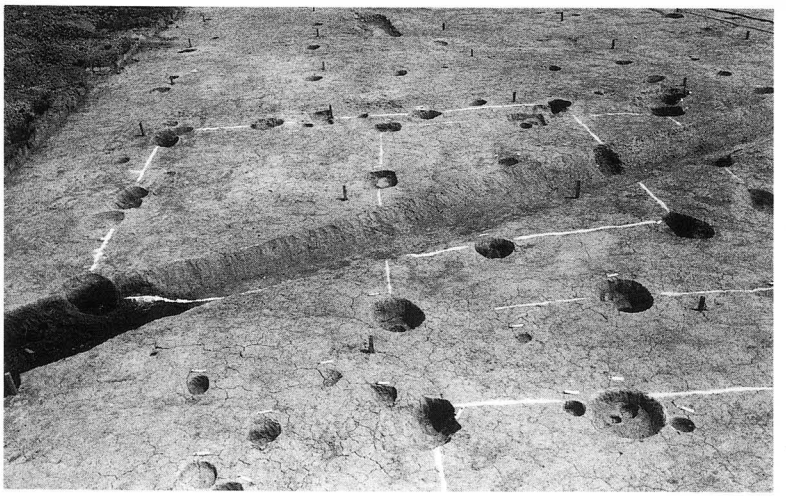
ST－06（E）



ST－07（S）

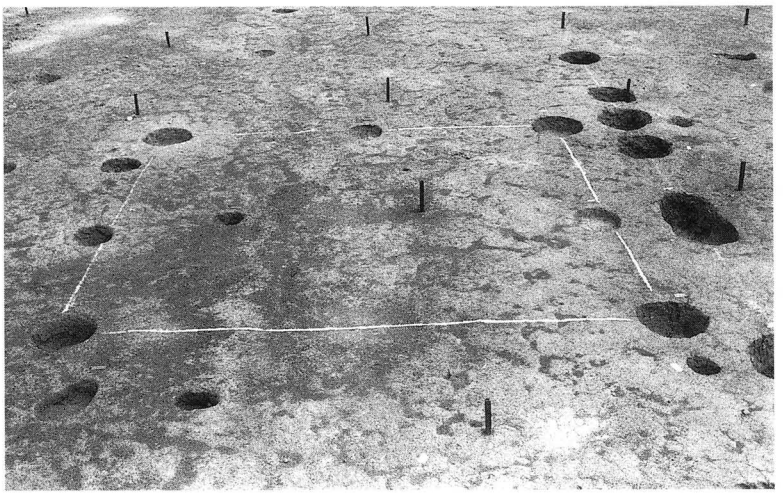


ST－08（S）

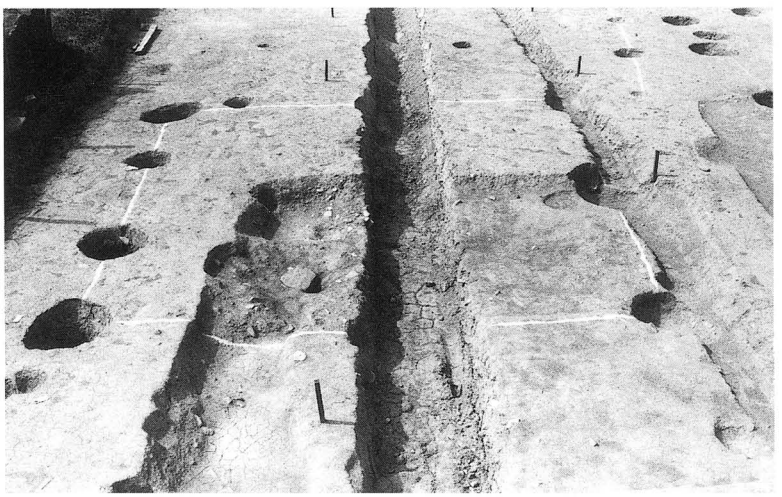


ST－09（S）

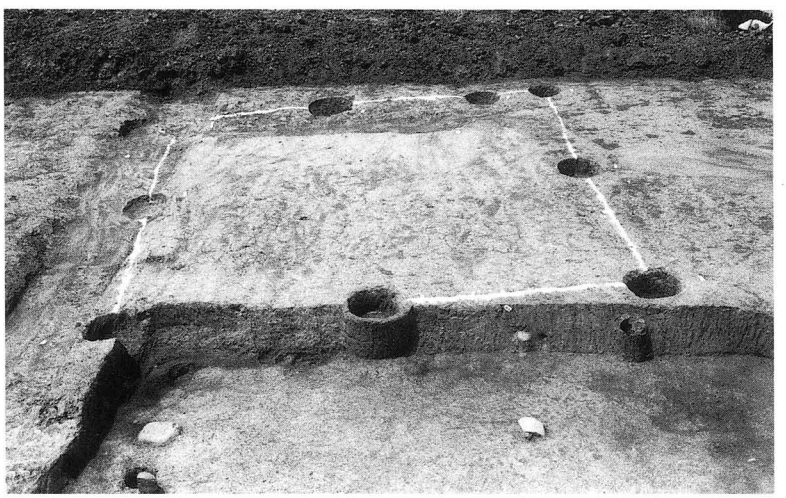
ST－10（S）

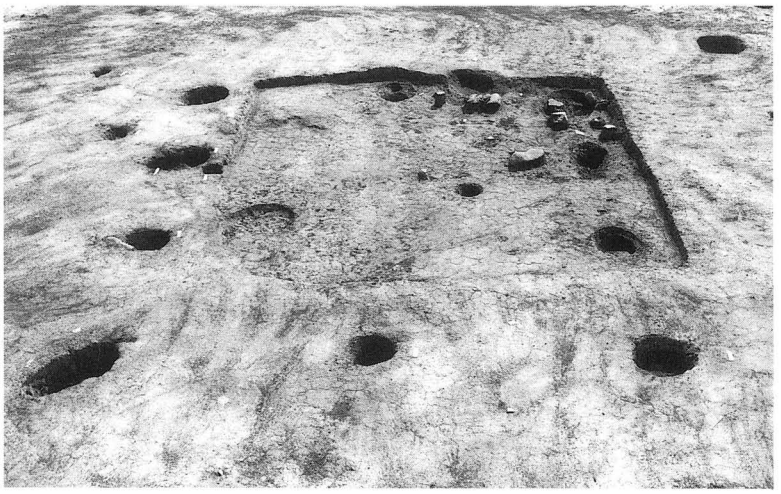


ST－11（N）

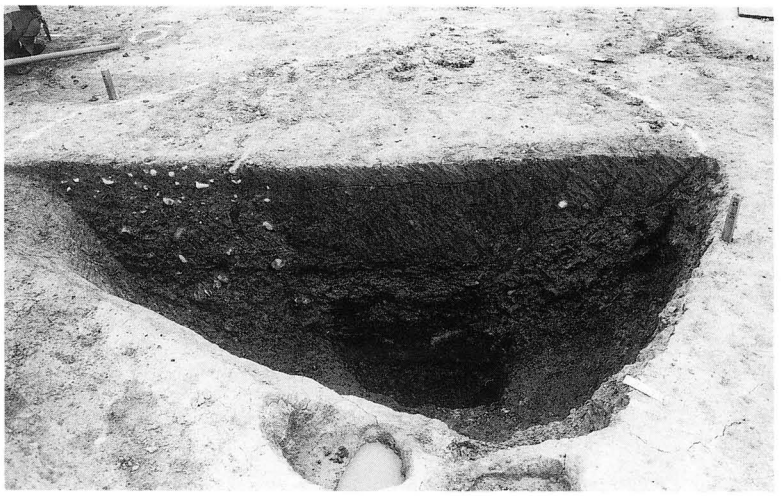


ST－21（E）





ST－22（W）

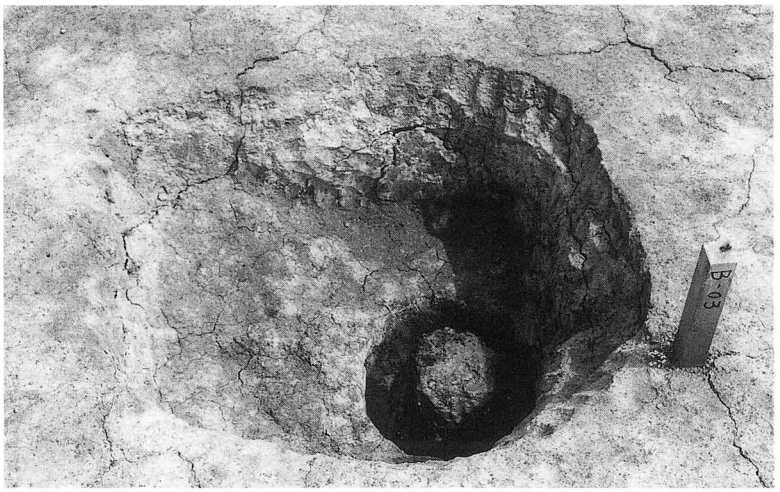


SK－03セクション（S）

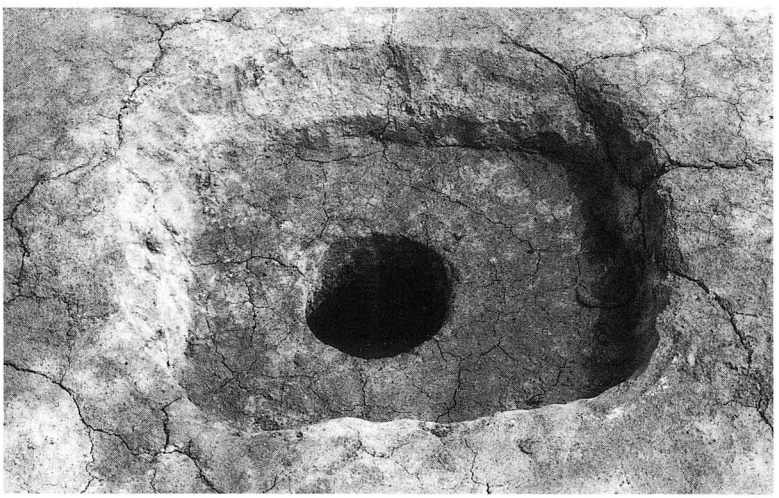
SK－03木組

図版

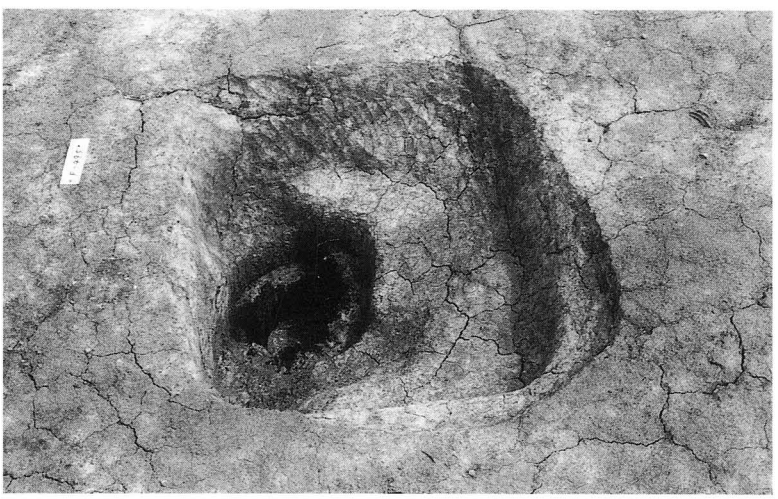
27



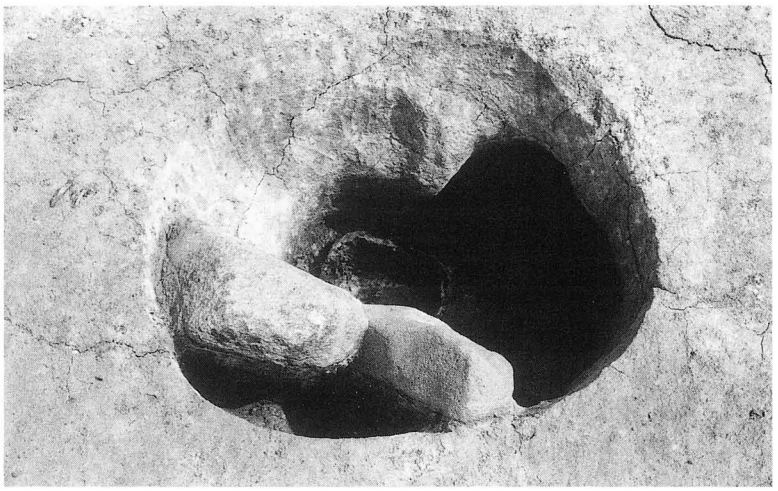
P－413（S）



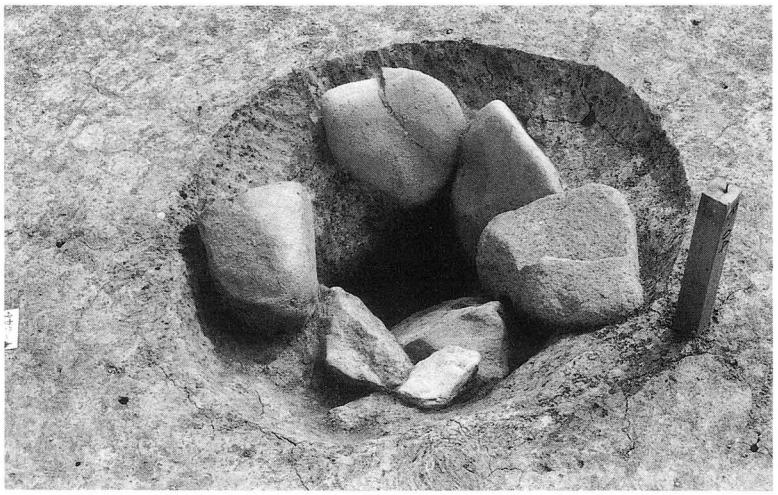
P－415（S）



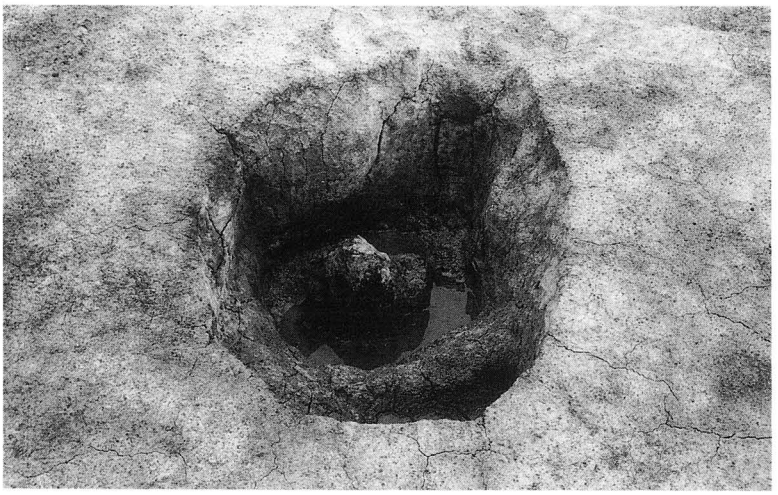
P－495（S）



P－534（S）

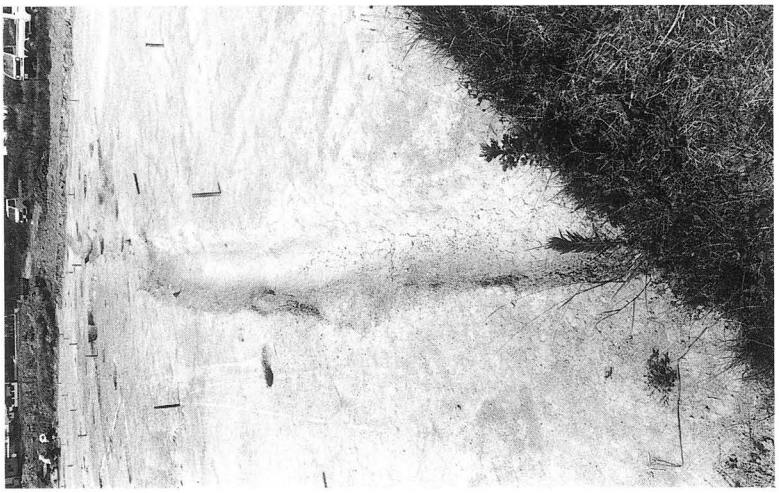


P－548（SW）

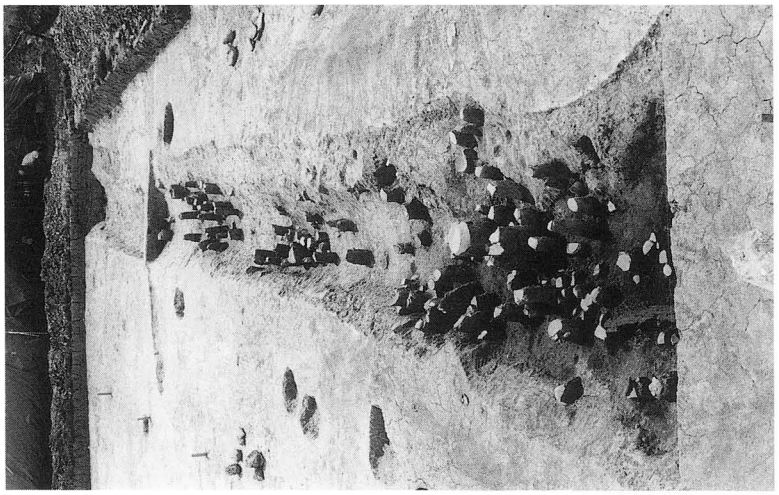


P－565（S）

図版29

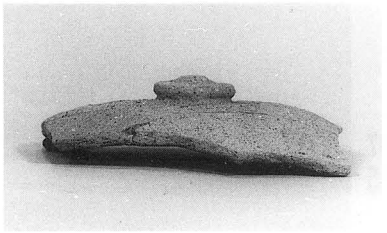


SD－03（NE）

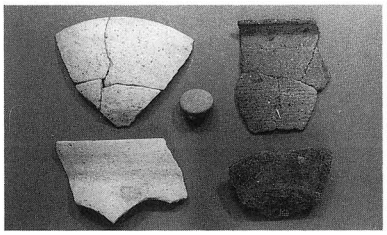


SD－06（W）

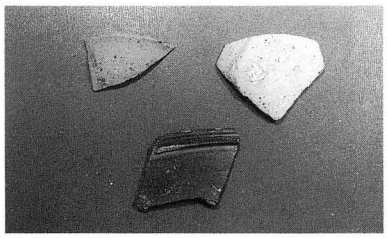
現場作業員の皆さん



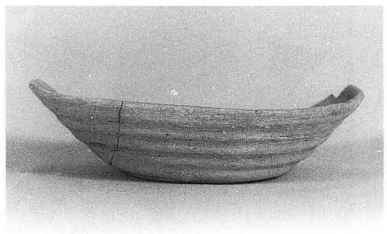
SB-01 -3



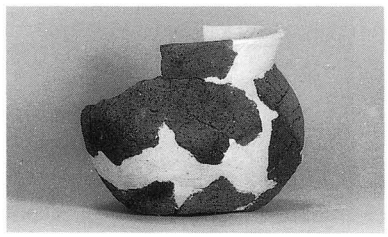
SB-01 -1～-2 -4～-6



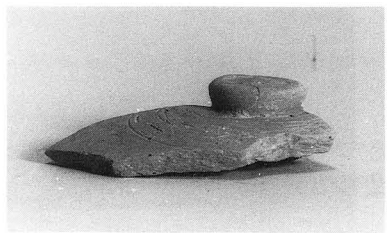
SB-02 -1～-3



SB-03 -2

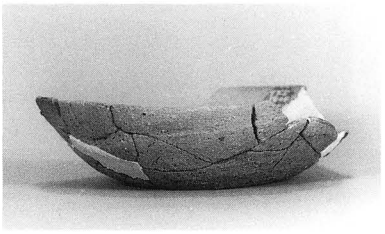


SB-03 -3



SB-04 -1

SB-04 -2



SB-04 -3

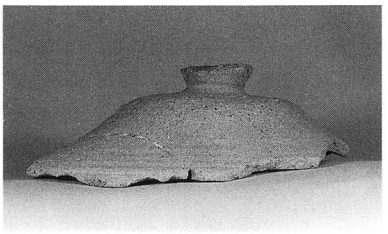
SB-04 -4

SB-04 -5

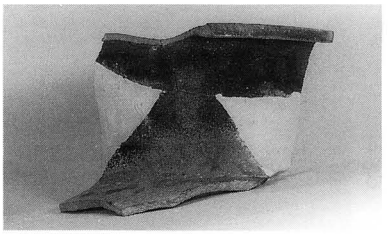
SB-05 -1

SB-05 -2

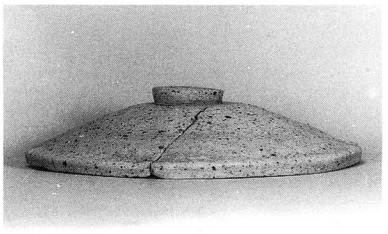
図版31



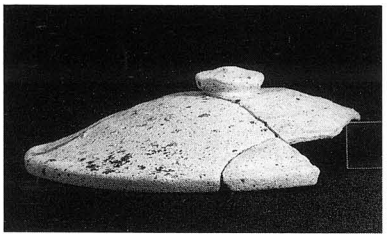
SB-06
-1



SB-06
-5

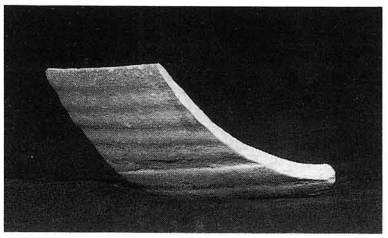


SB-07
-1

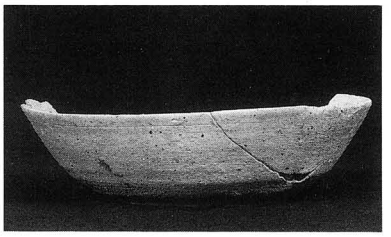


SB-07
-2

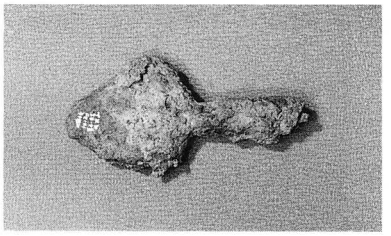
SB-07
-3



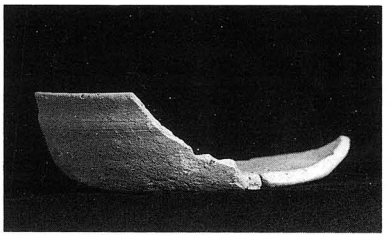
SB-07
-4



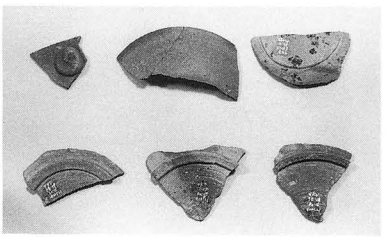
SB-07
-5



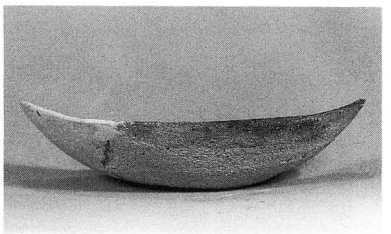
SB-08
-9



SB-08
-3

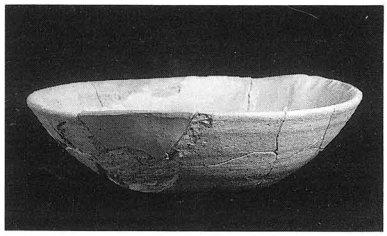


SB-08
-1

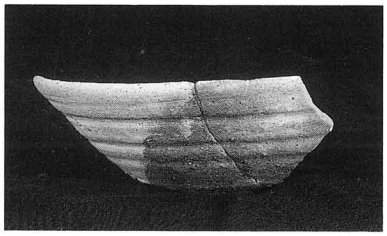


SB-09
-1

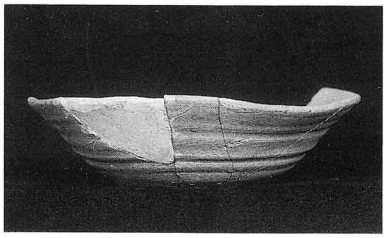
SB-09
-2



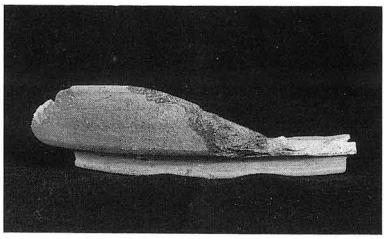
SB-09 -3



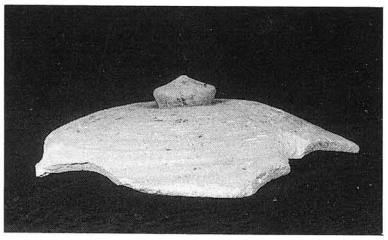
SB-09 -4



SB-09 -5

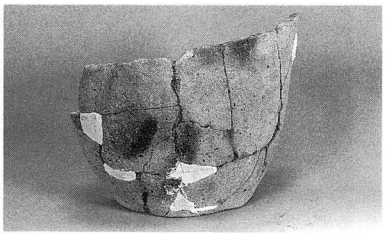


SB-09 -7



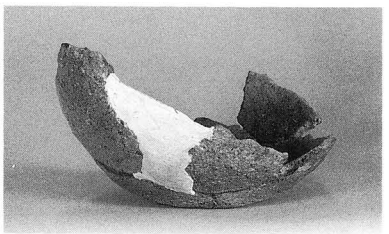
SB-11 -1

SB-11 -2

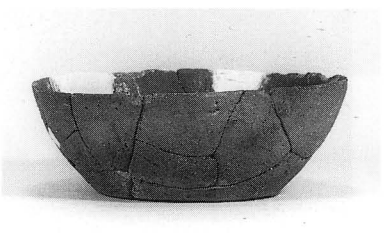


SB-13 -1

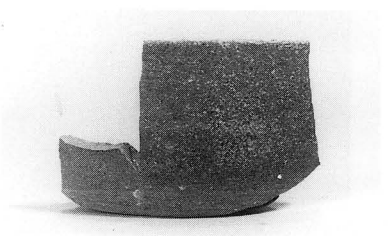
SB-13 -2



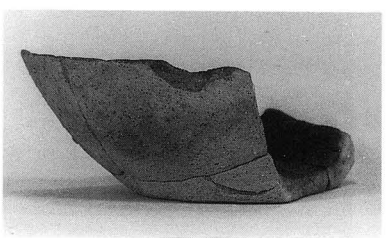
SB-13 -3



SB-21 -1

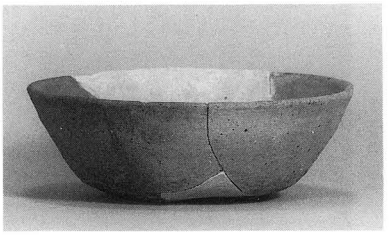


SB-21 -3

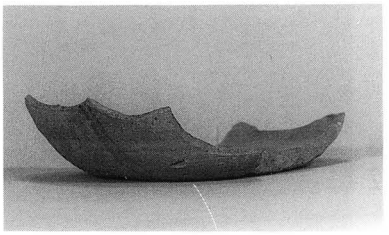


SB-22 -1

図版33

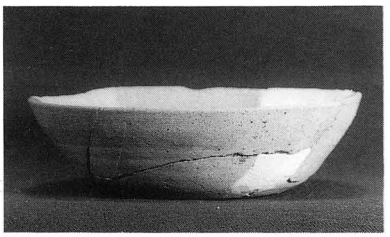


SB-22
-2

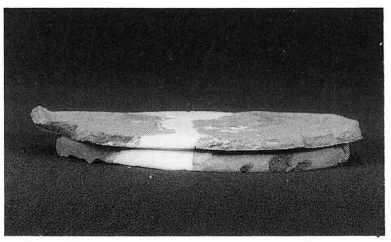


SB-22
-3

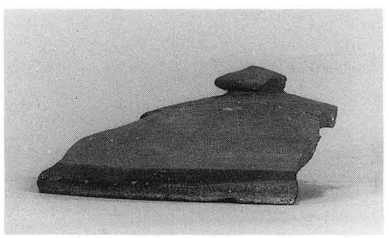
SB-23
-1



SB-24
-25
-26
-1

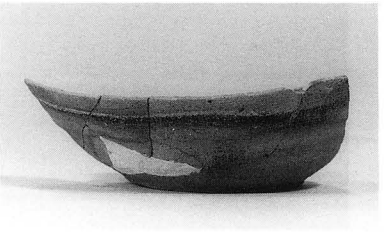


SB-24
-25
-26
-5

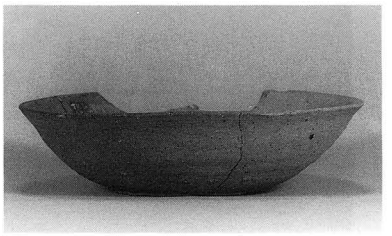


SB-27
-1

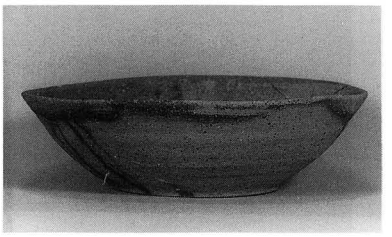
SB-27
-2



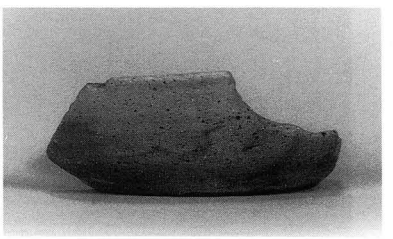
SB-28
-1



SB-29
-1

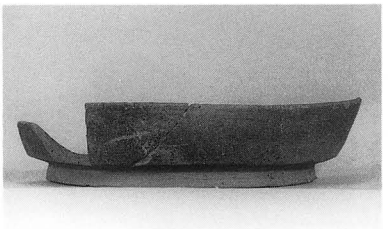


SB-29
-2

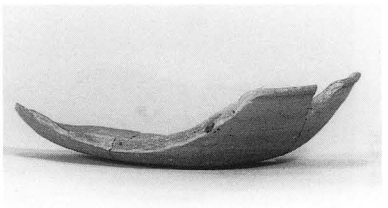


SB-29
-3

SB-29
-4

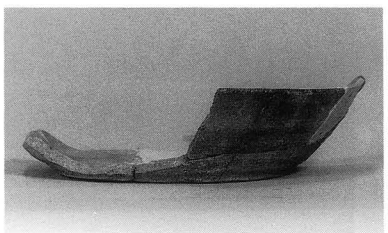


SB-30 -3



SB-31 -1

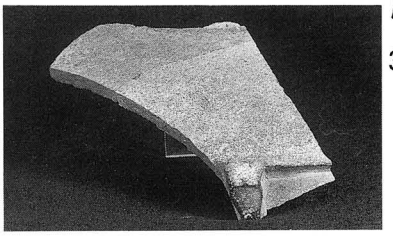
SB-31 -2



SB-31 -3

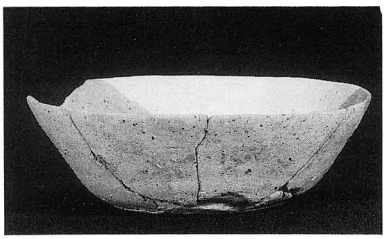
SB-31 -4

SB-31 -5

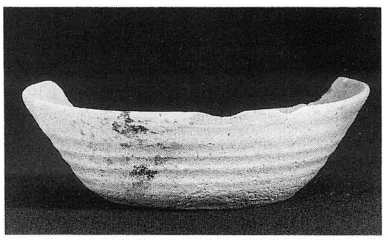


SB-31 -6

SB-32 -2

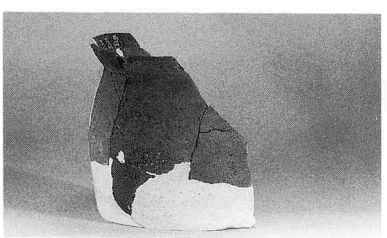


SB-32 -3



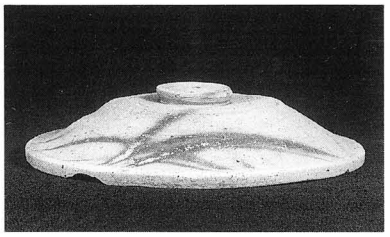
SB-32 -4

SB-32 -5

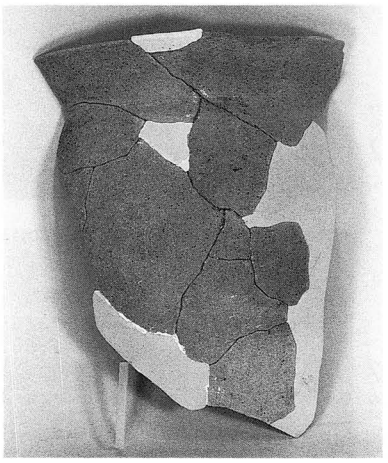


SB-32 -7

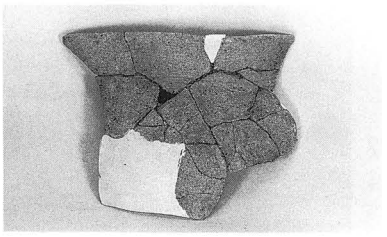
図版35



SB-34 -1

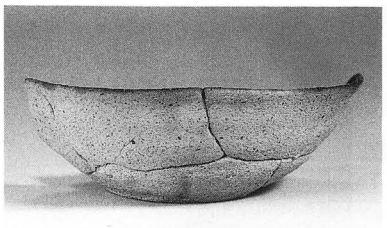


SB-34 -4

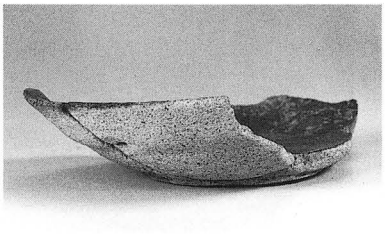


SB-34 -5

SB-35 -1

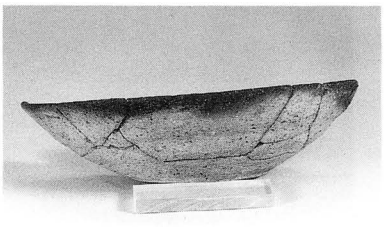


SB-35 -2

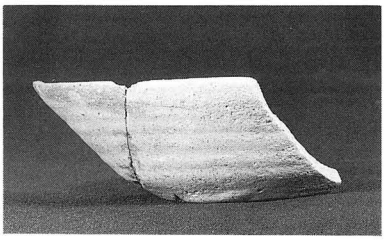


SB-35 -3

SB-35 -4



SB-35 -5

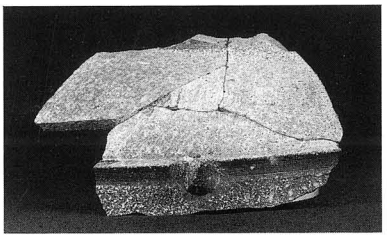


SB-35 -7

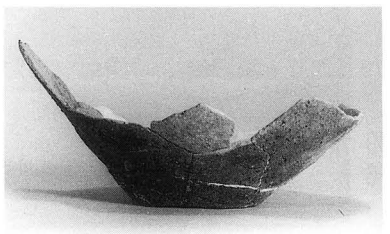
SB-35 -8

SB-35 -9

SB-35
-10
-11

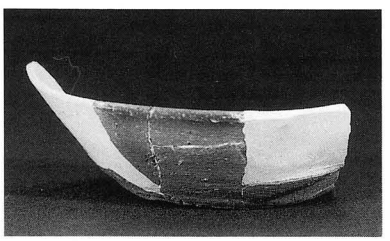


SB-35
-12



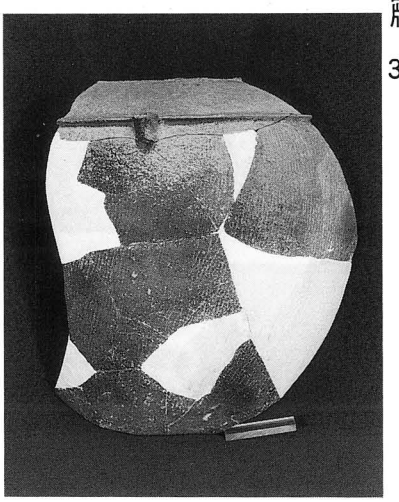
SB-36
-2

SB-37
-1

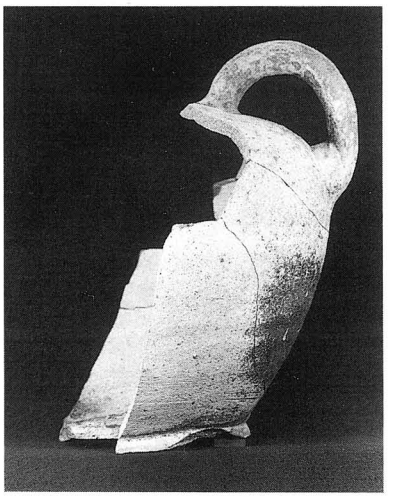


SB-37
-2

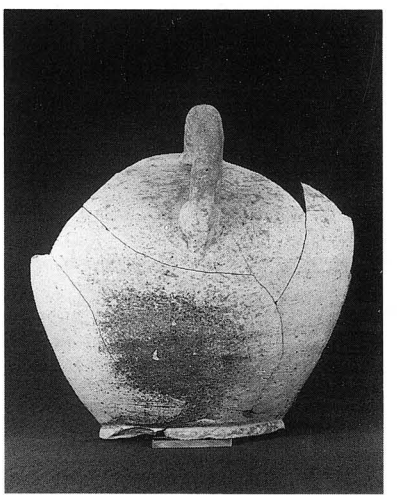
SB-37
-3



SB-37
-4

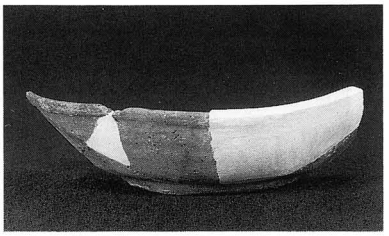


SB-37
-5

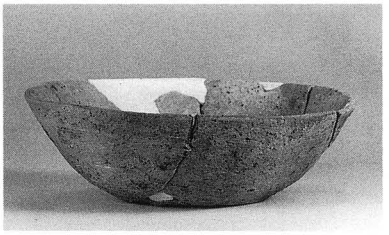


SB-37

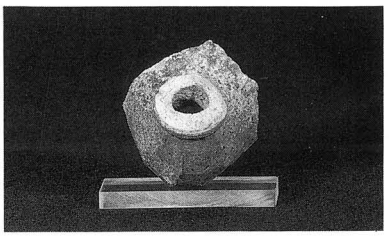
図版37



SB-38 -1

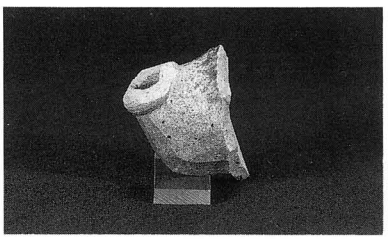


SB-39 -4

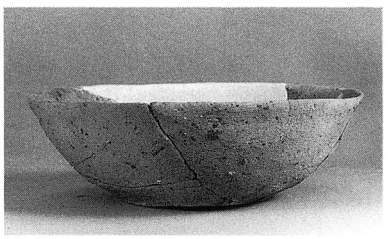


SB-38 -2

SB-39 -5



SB-38 -2

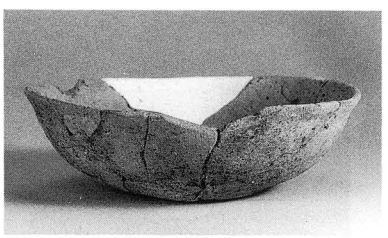


SB-39 -6

SB-39 -1

SB-39 -7

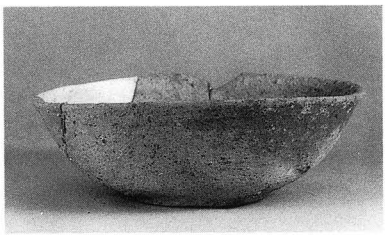
SB-39 -2



SB-39 -8

SB-39 -3

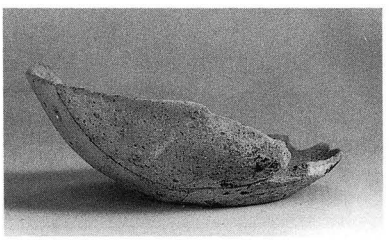
SB-39 -9



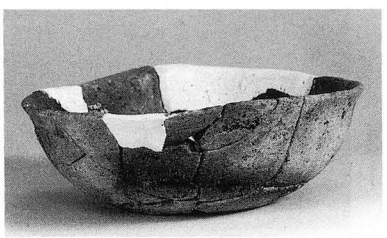
SB-39 -10

SB-39 -11

SB-39 -12



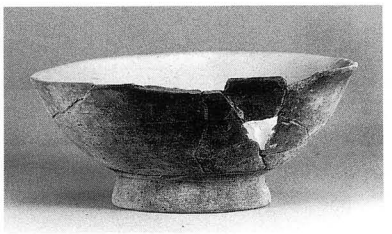
SB-39 -13



SB-03 -14

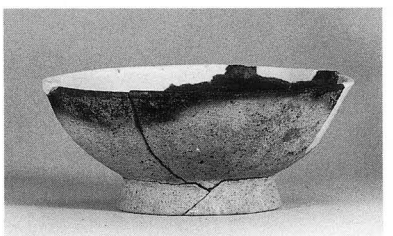
SB-39 -15

SB-39 -16



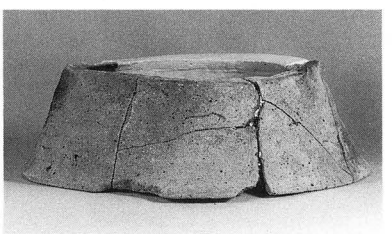
SB-39 -17

SB-39 -18



SB-39 -19

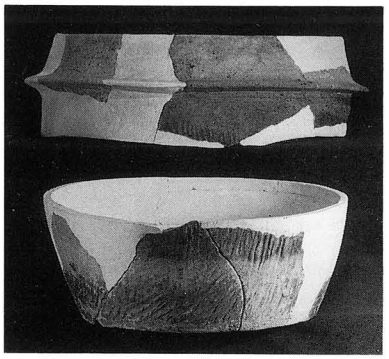
SB-39 -20



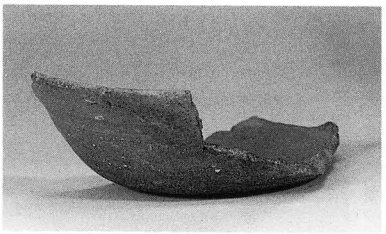
SB-39 -21

図版39

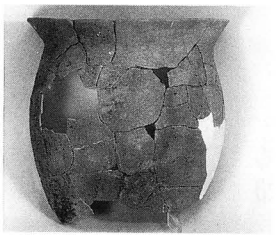
SB-39
-22

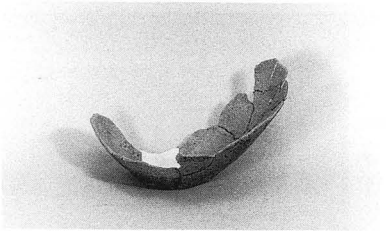


SB-39
-23

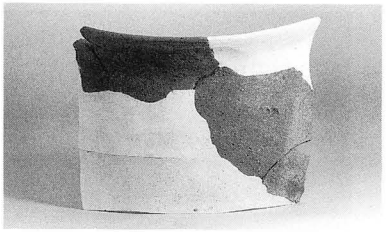


SB-40
-1



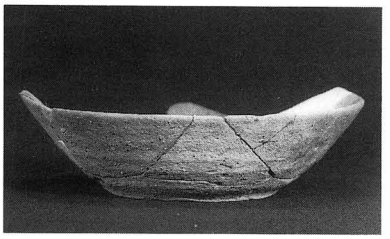


SB-40
-5
-6

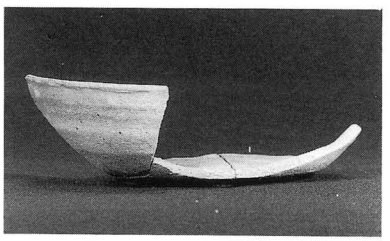


SB-40
-4

SB-41
-3

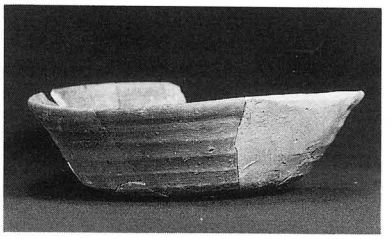


SB-42
-1

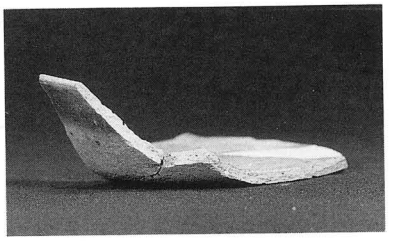


SB-42
-2

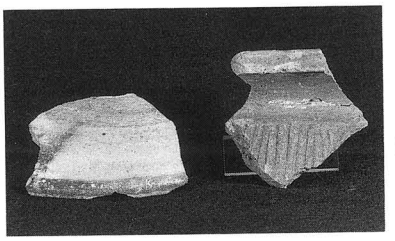
SB-43
-1



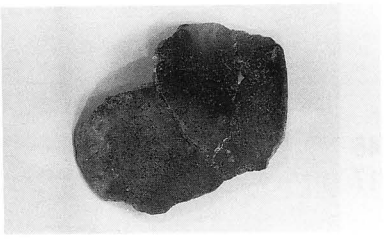
SB-43
-2



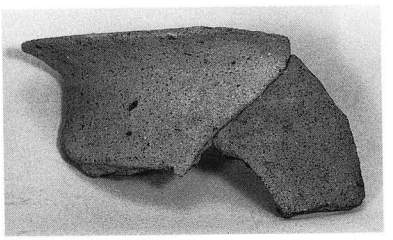
SB-43
-3



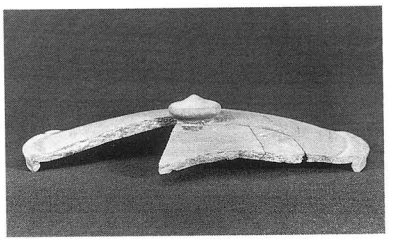
SB-44
-1
-2



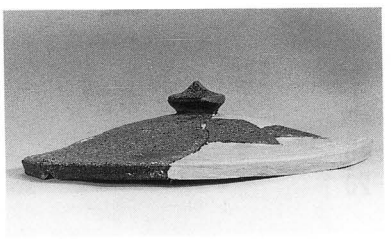
SB-45
-1



SB-45
-2



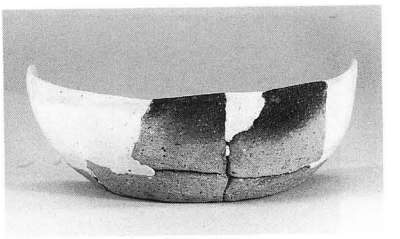
SB-46
-1



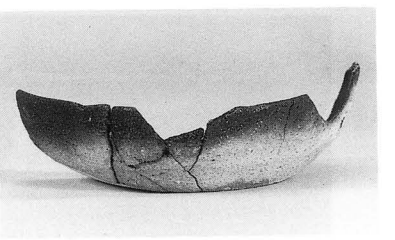
SB-46
-2

SB-46
-3

SB-46
-4



SB-46
-5

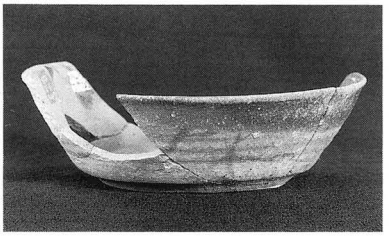


SB-46
-6

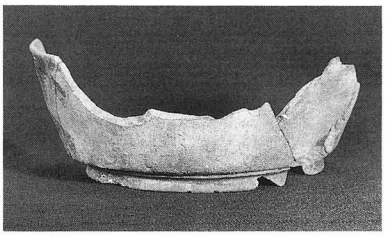
SB-46
-7

SB-46
-8

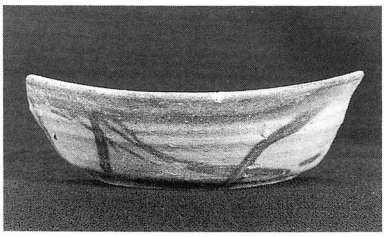
図版41



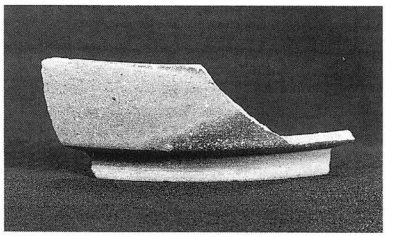
SB-46
-9



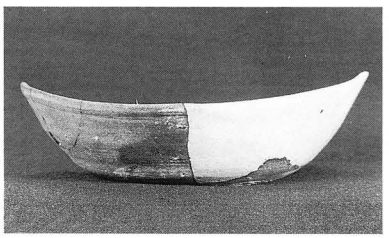
SB-46
-15



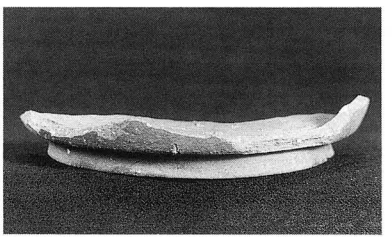
SB-46
-10



SB-46
-16

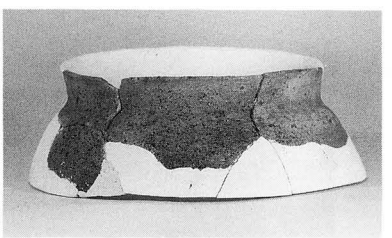


SB-46
-11

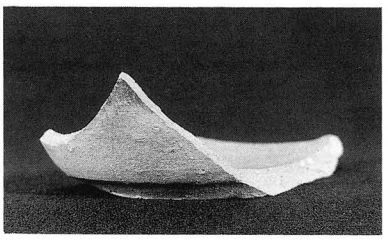


SB-46
-17

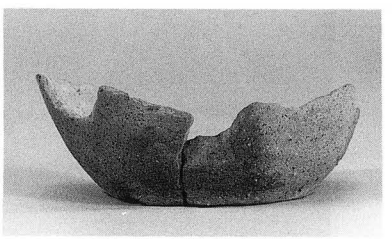
SB-46
-12



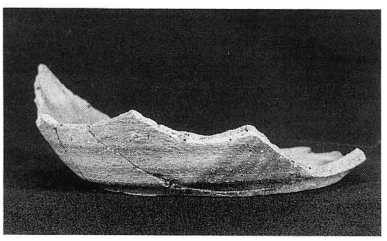
SB-46
-18



SB-46
-13

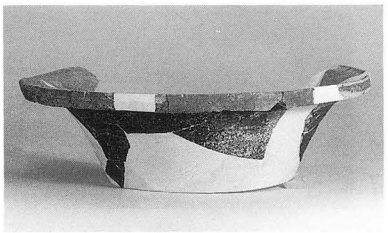


SB-46
-19

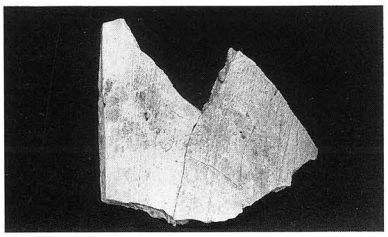


SB-46
-14

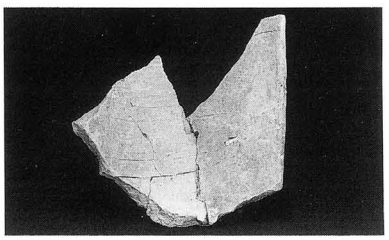
SB-46
-20



SB-46
-21

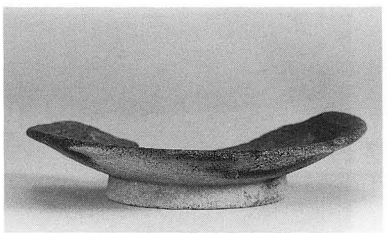


SB-46
-22



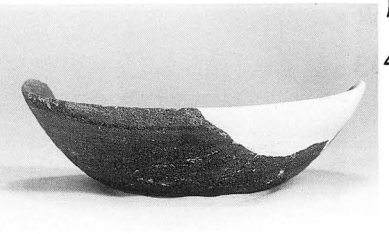
SB-46
-22

SB-49
-1



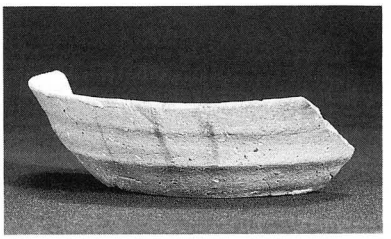
SB-49
-2

SB-50
-2

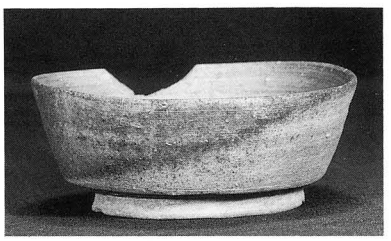


SB-50
-3

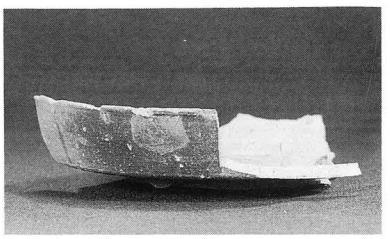
SB-51
-1



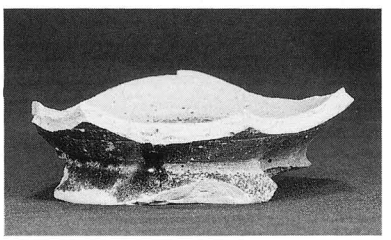
SB-51
-2



SB-51
-3

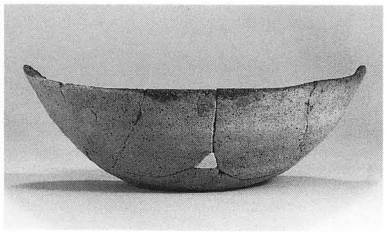


SB-51
-4



SB-51
-5

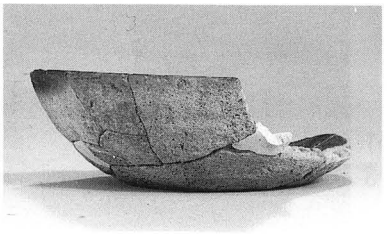
図版43



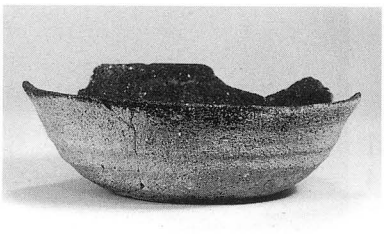
SB-52
-1

SB-52
-2

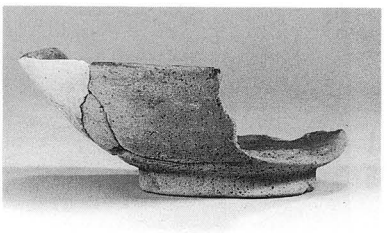
SB-52
-3



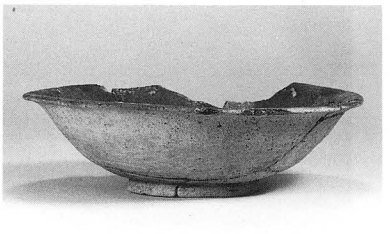
SB-52
-4



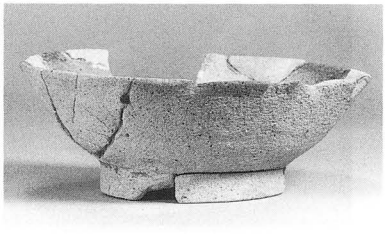
SB-52
-5



SB-52
-6

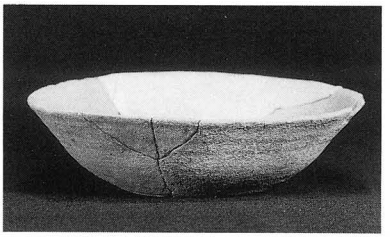


SB-52
-7

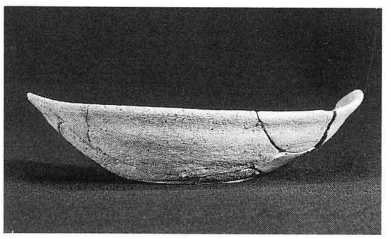


SB-52
-8

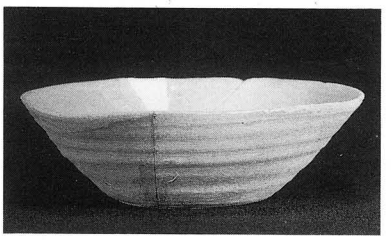
SB-52
-9



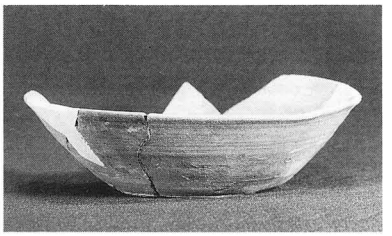
SB-52
-10



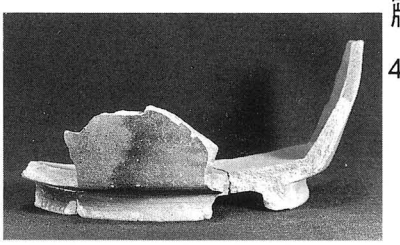
SB-52
-11



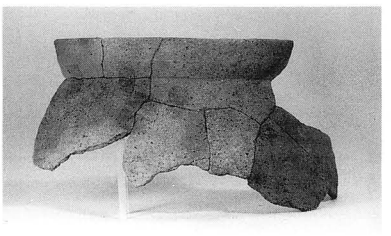
SB-52
-12



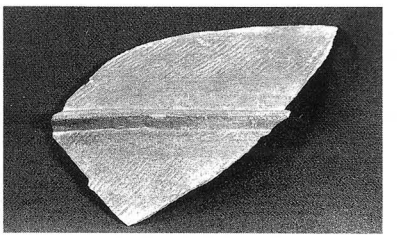
SB-52 -13



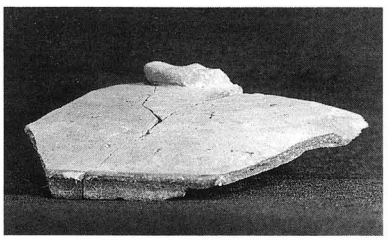
SB-53 -6



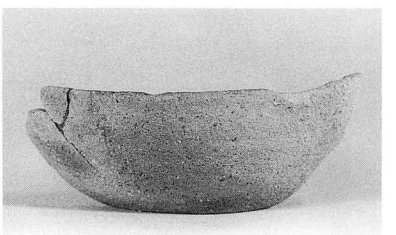
SB-52 -15



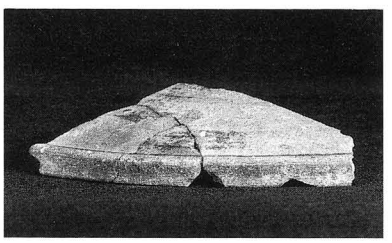
SB-53 -7



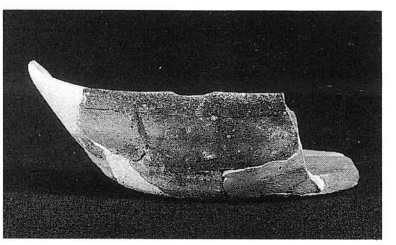
SB-53 -1



SB-56 -1

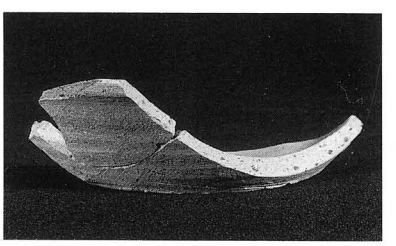


SB-53 -2



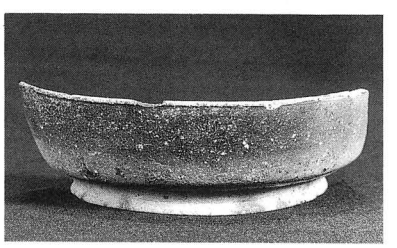
SB-56 -2

SB-53 -3



SB-56 -3

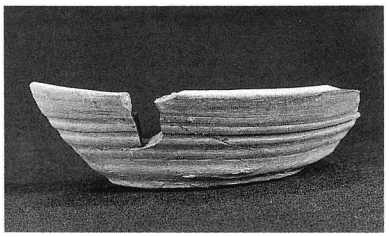
SB-53 -4



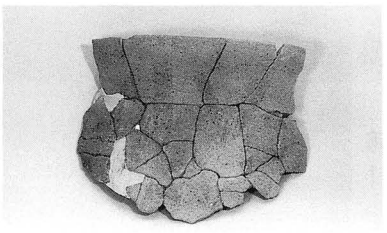
SB-56 -4

図版45

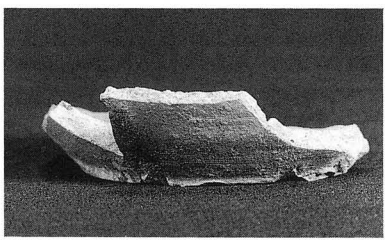
SB-57
-1



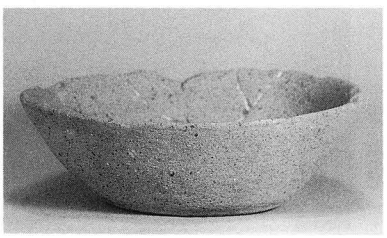
SB-57
-2



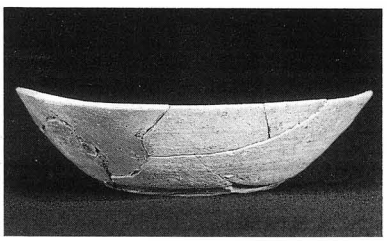
SB-57
-6



SB-57
-7

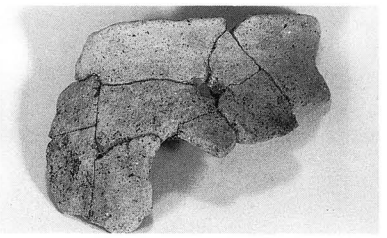


SB-58
-1



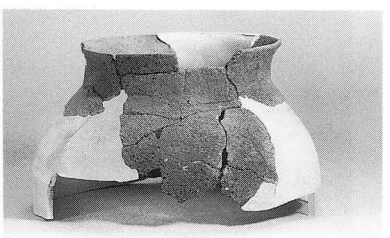
SB-58
-2

SB-58
-3



SB-58
-4

SB-59
-1



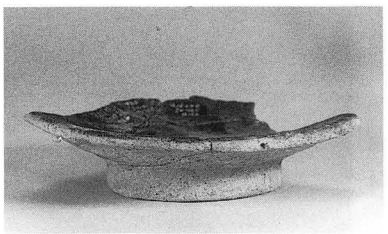
SB-59
-3

SB-59
-4

SK-03
-1

SK-03
-2

SK-28
-2

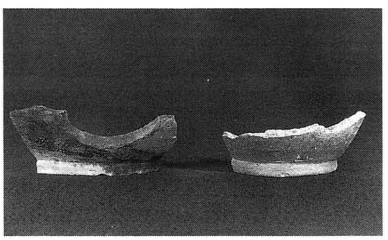


SK-03
-3

SK-31
-1

SK-03
-4
-5
-6

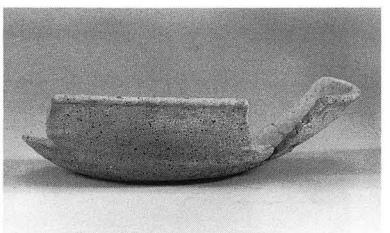
SK-31
-2



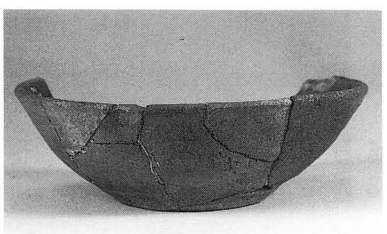
SK-03
-7
-8

SK-31
-3

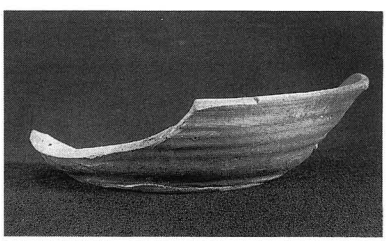
SK-11
-1



SK-31
-4

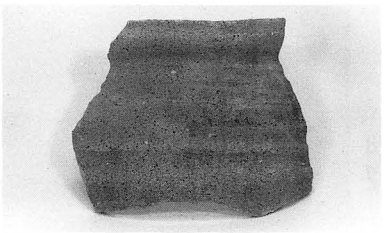


SK-28
-1



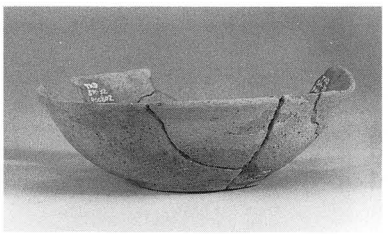
SK-31
-5

図版47

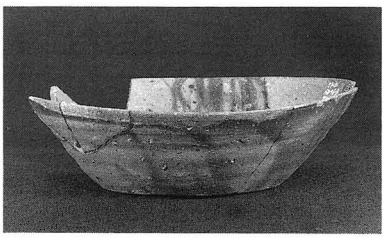


SK-31 -6

SD-06 -3

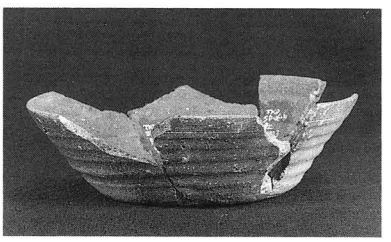


SK-32 -1

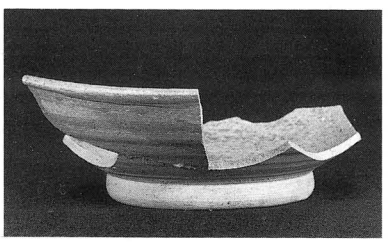


SD-06 -4

SK-32 -2

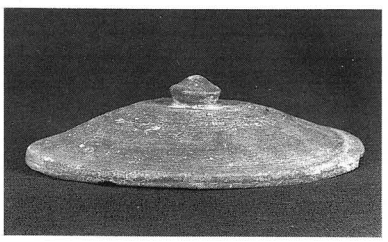


SD-06 -5



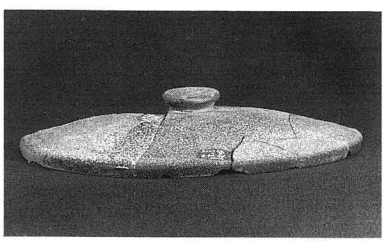
SK-35 -1

SD-06 -6



SD-06 -1

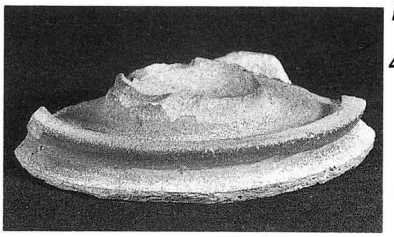
SD-06 -7



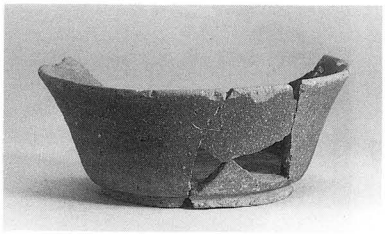
SD-06 -2

SD-06 -8

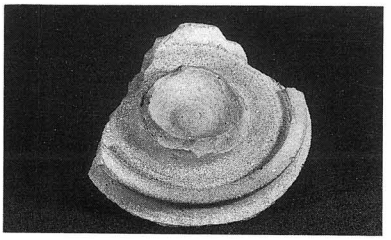
SK-06
-9



SD-07
-1

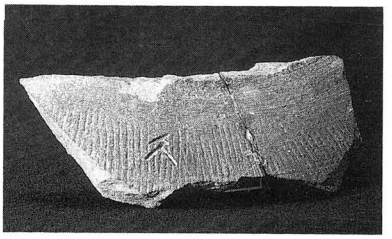


SD-06
-10



SD-07
-1

SD-06
-11



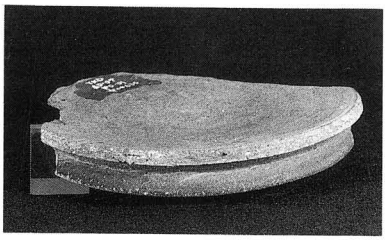
遺構外
出土
刻書土器

SD-06
-12

調査
風景
90年
4月19日

SD-06
-13

4月24日



SD-07
-1

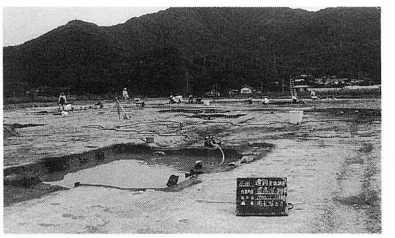
5月2日

図版49

5月21日

7月25日

6月8日



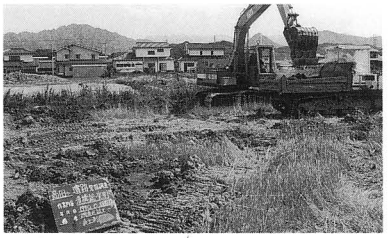
8月17日

6月12日

8月20日

6月15日

9月1日



6月18日

9月8日

6月20日

9月12日

あ と が き

本遺跡は高田堰南側の調査区の掘立柱建物址群とSD－06に見られる、「条里の中の」一定の計画性のある集落の形成が特徴である。特に、ST－01はSB－07を、ST－02はSB－04を、ST－03はSB－05を、また、ST－04、05、09が自然の流路と思われるSD－04をそれぞれ切っていることに見られるように、SD－04を中心に自然発生的に展開した集落をこれらの掘立柱建物址群が駆逐した様相が窺われる。それはまた、SD－04が計画的用水路と目されるSD－06に取って変わられた可能性の高いこと、SD－06の意図的な水路の屈曲、建物址群とSD－06の主軸の直行にもみられる。因みに、条里の主軸はN－3°－E、掘立柱建物址の主軸は第7表のとおりで、その平均値はN－3.725°－E、振れ幅は西へ最大3.5°、東へ最大7.5°の計11°の中に収まる。また、SD－06はN－94.5°－E、高田堰はN－94°－Eで、建物址群とほぼ直行する数値を示す。このことは、今まで不確定であった小泉の条里的遺構の形成時期に大いなる指標を与えられるものと考えられる。

現在遺る条里的遺構については、1989年上田市教育委員会発行の『琵琶塚Ⅱ』のとおり、『(前略)方1町毎に区画された条里的地割りは、その後もあまり極端に形を変えることなく現在に至っている。(後略)』とすれば、高田堰南側の調査区の掘立柱建物址群とSD－06は条里的遺構の形成時期と一致し、同報告書で平安時代後期から終末期以後と推定されたものより、あるいはもう少し遡ることができるかもしれないが、現段階では出土遺物の整理の中途で、時期の推定ができかねること、また、溝・ピットという遺構の性格上、出土遺物から時期を決定するのが難しいことにより、今後の整理・研究に期待したい。

条里的遺構と共に是非とも研究の対象としなければならないのが、令制東山道(以下、東山道という)との関係である。創置の信濃国府が上田盆地に置かれ、8世紀の初頭に東山道がこの遺跡の至近を通っていたことは、従前の研究により明らかとなっているところであるが、近年、黒坂周平氏を中心とする東山道の研究によれば、条里的遺構を斜めに走る字境が、東山道の痕跡である可能性が、字名との関係で高いという。残念ながら、遺跡周辺の字名と字境は、明治初年の統合措置により南北に長い、いわゆる『まんじょう』となり、古い地名・字境は残っていないが、「大道添」の地名があったこと、現在、大道下・清水田など、古道に関係した地名が残っていることからすると、東山道は、高田遺跡直下の段丘下を通っていた可能性が高い。しかし、段丘下の試掘調査では道跡等は検出されていないが、自然災害などによる土砂の被覆がない当地域では致し方ないことである。さらに、当地域は『倭名類聚抄』小県八郷の『福田郷』であったこと等も考えるとき、本遺跡の歴史的意味はいよいよ重要なものとなり、今後の研究を待つ次第である。

上田市文化財調査報告書　第39集

高　　田

高田遺跡緊急発掘調査概報

発　行　　平成3年3月25日
　　上田市教育委員会
　　上小地方事務所
印　刷　　田口印刷株式会社